

願いの魔法

Before

The

Storm

(下)

赤い死神

# 目次

第六章 癒えぬ傷を抱いて

第七章 葛藤

## 第六章 癒えぬ傷を抱いて

日本という国は、諸外国からは魔法帝国と呼ばれている。

その由縁は、この世界において日本人だけが生まれつき有している魔力というエネルギーを用いた、魔法という技術からきたものだった。

諸外国ではまるでおとぎ話のような魔法の存在が日本には実在しており、それこそ日本が魔法帝国と呼ばれる由縁である。諸外国から見れば、日本人は全て 魔法使い というように見られている。

だが、日本国内では 魔法使い の定義が諸外国とは少し違う。日本において、魔法使い を名乗るためには、資格が必要となる。

その資格というのが、魔法使いの養成を主目的とした教育機関を卒業することだ。日本人であれば誰でも魔法が使えるが故に、ただ魔法が使えるだけでは 魔法使い を名乗ることは出来ない。例えどれだけ強力な魔法を操れた所で、その教育機関を卒業していなければ、魔法使い とは呼ばれない。

日本の各地にあるその教育機関。その中の一つである、アーレント魔法学園でつい先日二人の学生間で激しい戦いが行なわれた。

戦いの場となった学園の中庭は、一日経った今でもその傷跡を無惨に晒しており、その戦いの激しさは、魔法使いとなるために毎日実戦訓練をしている学生達ですら畏怖と恐怖を覚えるほどの物だった。

……のだが、

「よっ。おはよう」

その当事者の一人である風見俊介は、妹である千里と共に、今日も平然と学園へと登校してきていた。

「風見か。おはよう」

「おはよう、中田君」

「ああ、おはよう。風見妹」

そんな彼らをいつも通り出迎えたのは、友人である中田健一ただ一人だけで、クラスメイト達は少し遠巻きに俊介達を見るばかりだった。思わず俊介がため息をつく。

「ここに来るまでもそつだったけども、どうにも避けられてるってか、何か言われてる気がするぜ」

「あれだけ大立ち回りをすればそうもなるだろう」

「凄かったのはオレじゃなくてレイの方だろ」

言って、俊介は昨日戦った……いや、喧嘩をした友人を探すが、教室内にその姿は見あたらない。

「あのレイの相手を出来ただけでも相当な物だと思っがな。だがまあ確かに今回は、風見は巻き込まれたただけだな」

「んで、レイは？ まだ来てないのか？」

「お兄様でしたら、今日は自宅で謹慎なさっていますわ」

俊介の声に心えたのは、レイの妹である藤原アイだった。

「謹慎？ 俊ちゃん普通は普通に学校に来てるのに？」

「オレは何も言われてねえぞ？ あー、けど、昨日話を聞かれた時に、あったことそのま

ま話したからな……」

事の発端は、レイが下級生の女子に対して暴力を振るおうとしていた場面に出くわした俊介がそれを阻止したことだ。その後も、先に手を出してきたのはレイの方だったこともあり、俊介は注意を受けただけで解放されたのだが、レイの方はそうもいかなかったらしい。

「いえ、それは違いますわ」

と、考えていた所をアイがあっさり否定する。

「学園側からお兄様に対して、一切処分はありませんでしたわ」

「何でだよ？ いや、レイを処分しろってことじゃなくて、あれだけのことをやっとしてお咎めなしってそりゃ変だろ」

「しかしそれを言うなら風見 お前にも何らかの処分があるのが普通だと思っぞ」

「何でだよ？ オレは売られた喧嘩を買っただけだぜ？」

「それはそうかもしれないが、基本的に両成敗にするのが学校という物だろう。無論、風見が無抵抗であつたら別の話だが」

「無抵抗だったらオレは死んでるっての」

「それはそうだが、最終的にあの一件はお前達二人の喧嘩、ということが終わったのだろう？ 怪我人もお前達以外出ていないし、学園としてもそう収めたかっただろう」

「んじゃ、何でオレにもレイにも何の処分もないんだよ？」

「お兄様を処罰できる者がこの学園にいないからですわ」

俊介の疑問にアイが答える。いつもはキラキラと輝いている瑠璃色の瞳が、今日ほどことなく曇っているように見える。

「今回の争いの原因はお兄様にあります。そのお兄様に処罰がくだされないというのに、風見様だけに罰を与える訳にはいかない。だから、お二人ともお咎めなしになったのだと思います」

「レイを処罰できる人間がいない……ねえ」

もう何度も思い知らされてきたことだが、やはりレイもアイも、俊介や千里のような一般市民とは違う、それなりの身分を持っているのだろう。

それもこの学園から見ても逆らえないほど立派な。

「まっ、いいけどな。んじゃ、何であいつは謹慎なんてしてんだよ？ 学園に来ればいいじゃねえか」

「何も罰を受けなかったからと言って、自分のしたことが許されるわけではないと、そう考えているのだと思いますわ。誰かが罰を与えないからこそ、お兄様は自分で自分を罰しているんですわ」

「それに……藤原自身、少し心の整理をする時間が必要だろう」

普段は冷静で、戯言で人をからかってばかりいたレイが、暴力などという直情的な行動に出た理由。

愛した人との別れを受け入れることができずに、一人で抱え込み、そして溜まりに溜まった鬱憤が爆発した。

「大丈夫かな……藤原君」

「あんだだけ大暴れすりゃ、少しはスッキリしたたる」

心配するように口を開いた千里に、俊介が軽い口調で言う。

「もうあいつは一人で抱え込んだりしねえよ。それに、いざとなったらまたオレが止めてやればいいだけの話だしな」

「駄目だよ、俊ちゃん。あんな危ないこと……凄く心配したんだからね」

「お前が心配しすぎなんだよ。あれぐらいどうってことねえって」

「上から見てたら全然そんな風に見えなかったよ。藤原君、すっごく強かったんだもん」

「そりゃあいつの本気は洒落にならなかったけどよ……ちゃんと勝っただろ？」

「でも、それってわたしが藤原君の高位魔法を止めたからでしょ？」

高位魔法とは、詠唱によって決められた形に魔力を構築し発現させる、通常の魔法よりも遙かに強力な魔法のことである。

昨日の戦いでは発動の前に防がれていたが、もしも発動していたら俊介どころか学園の校舎が全て凍っていたかもしれない。

「あのままだったら、俊ちゃん藤原君に負けてたかもしれないよ？」

「別にお前の魔法がなくなっただって何とかしてたっての」

「むーっ。俊ちゃんのこと心配で必死で頑張ったのに、そういう言い方するんだ……ぶーん」

ツンと拗ねるように首をそらせる千里。その動きにつられて長い黒髪が小さく踊った。

「な、何だよ……」

「折角頑張ったのに、わたしのやったことは俊ちゃんにとって余計なお世話だったんだなあって」

「誰もんなこと言っていないだろ。……まあ、確かにあいつの高位魔法を受けてたら確かにやばかっただろうけどよ。だからって、逃げるわけにもいかなかったのもわかるだろ？」

「でも、やっぱり心配なんだもん。俊ちゃんに何かあったらって思つと、何だか胸がキュッと締め付けられるみたいに痛くなるの」

「おいおい、もしかしてどっか悪いのか？保健室にいくか？」

「うーん……そう言つのはちょっと違う気がするかな」

\* \* \*

仲よさげに言葉を交す二人を見ながら、健一はいつになく静かなアイの方へと目を向ける。意識しなくても目に止まる、綺麗な金色の髪を持つ少女は、健一と同じように何も言わずに俊介と千里の方を眺めていた。

……何も、言わずに。

「……いいのか？」

だから、思わずそう訊ねてしまった。

「……何がですか？」

「それは……」

言葉に、詰まる。

『私は、これっぽっちも強くなってありませんわ』

つい先日聞いたばかりの、アイの本音。

『……風見さまのことだって、本当はわかっていますわ。風見様は……私が想っているようには私のことを見てくれないと、いい加減、気付いてますわ』

……今、一体アイがどんな気持ちで二人を見ているのか、想像に難くない。

「……お兄様は、今もまだとても辛い想いをしているらっしゃいますわ」

「こんな時に、レイの心配か？……お前らしいな」

「貴方如きにお前呼びわりされたくありませんわ」

「それは、すまなかつたな」

こう言つ時、どう言葉を掛ければいいのかわからない。

慰めればきつと反発するだろう。

同情は蹴り飛ばされるだろう。

応援は……ただ、惨めになるだけだろう。

「兄妹の仲がいいのは、良いことですわ」

それは、どちらの兄妹を指した言葉なのか。力のないその瞳に問いかけても、答えは返ってこないだろう。

「一日でも早くお兄様が元気になられるよう、私がお兄様を支えますわ」

「……そうか」

当たり障りのない相槌しか打てない自分が情けない。

何か気の利いたことは言えないのか。

いや、そもそも……

(俺は……どついつ言葉を掛けたいんだろうな?)

アイにどうなって欲しいのか。

それは、元気になって欲しいと思う。アイは騒がしいぐらいが丁度いいと思う。

そのために、言葉を探しているのだろうか。

「辛くは……ないのか?」

考えて、やっと出てきた言葉は、やはり、この程度のものだった。

「言っただけですわ。お兄様は、今もとても辛い想いをしているらっしゃると」

「俺はレイのことを聞いた訳じゃない。……わかっているんだろう?」

「貴方こそわかっていきますか? お兄様が今どれだけ辛い想いをしているか?」

「……想像することしかできないな」

「でしょうね。所詮貴方ではその程度ですわ」

「なら、お前にははつきりとわかるのか?」

「ええ、勿論」

尊大な態度はいつもと変わらず、だがその目はこちらを見ようとしない。

……まるで、こちらの視線から逃げるように。

「お兄様の辛い気持ち、どれだけ辛い想いをしているのか……私には痛いほどわかりますわ。お兄様は……今の私と同じか、それ以上に辛いのですわ」

紛れもないアイの声で、一切の震えも見えず、普段と何ら変わらない口調で言つ。

それでも、やはりアイはこちらを見ようとしない。

自分でも意識しないうちに、ギョッと握り拳を作っていた。爪が皮膚に食い込みそうな

程強く、ギョッと。

「アイ……」

「……何ですの？」

アイは……やはりこちらを見ない。

強引にでも振り向かせて、その目を見れば、何か掛ける言葉を見つけられるのだろうか。

握りしめた拳をほどいて、アイの肩を掴むだけでそれができる。

簡単なことだ。

簡単なことなのに……それが、できない。

「……いや、何でもない」

首を小さく振って応える。

「何でもないのなら、呼ばないで欲しいですわ。それから、私の名前を気安く呼ぶのも止めるよう何度も言っただけですわ。いい加減、覚えて欲しい物ですわね」

返ってくる言葉はいつにも増して刺々しい。

返す言葉もない。

アイもそれ以上何も言っただけは来なかった。

俊介と千里は、さっきと変わらず言葉を交し続けている。

健一達は何も言わず、お互いを見ることもなく、ただ黙って、二人を眺めていた。

\* \* \*

「レオナルド様は……今日、お休みなのですね」

誰に言っともなしに、絵里香が呟く。

教室に着いてすぐ、

始業のチャイムが鳴った後、

HRが終わった後

何度確認してみても、レイの席には誰もいない。

原因は……誰かに聞くまでもなくわかっていた。

(私のせい……)

幼馴染みで、許嫁でもあった相手。

長い間、恋い焦がれていた人。

ほとんどのことを思い通りにできるだけの力と権力を持っていながら、驕ることもなく偉ぶるわけでもなく、ただいつも笑っていた。からかうような軽い口調の裏に、真っ直ぐな誠実さを持っている人。

藤原レイは……レオナルドという人間は、そういう人だった。

だからこそ、自分の立場を意識して、縛られ、いつしか絵里香と距離を置くようになってたのだらう。

(少し前までの、私と同じ)

親に言われるがままに生きて、当たり前のようにレオナルドの元に嫁ぐものだと思っていた。

それ以外の選択肢などあるはずもないと、自分がそれ以外の選択肢を選べる立場にな

いと、また立場があるからこそ我が儘は許されない、そう思ってた……いや、決めつけていた。

その決めつけは、あるいは間違っていなかったのかもしれない。

それでも、レオナルドは絵里香に選択の自由を与えてくれた。

自分から許嫁という鎖を断ち切って、真っ正面から結婚して欲しいと言われた。

(そして、私は……)

与えられた選択の自由で、それを断った。

レオナルド以外の人を、選んだ。

その選択を認めてもらえるように努力して、今、自分が選んだ人と共にいる。その人といふことに幸せを感じている。好きな人と過ごす毎日に、充足を覚えている。

(だけど……)

その代わりに、レオナルドは今自分が感じている幸せとは真逆の想いを抱えることになった。レオナルドの幸せを犠牲にして、自分だけが幸せな毎日を送っている。

これで……いいのだろうか？

「浮かない顔をしていますね、絵里香さん。どうかされましたか？」

考えていることが表情に出てしまったのか、髪をアイと同じ金色に染めた少年、キース・クラウドが、自分の恋人が気遣うように声を掛けて来てくれる。

そのことが嬉しくて……苦しい。

キースが自分のことを心配してくれているというのに、自分は他の男性のことで心を悩ませているのだ。これを不実と言わずして何というのか。

「絵里香さん……」

いつも優しいに微笑んでくれるキースの顔には今、大きなガッゼが貼られている。

詳しい経緯はわからない。けれど、その傷がレオナルドによって負わされたと聞いていてい

る。そして、その経緯はともかく、キースがそんな怪我を負ってしまったのはやはり、自分のせいなのだ。

……考えれば考えるほど、悪いことばかり浮かんでくる。

(私がキースさんを選んだのは……間違いだっただの？)

自分以外の人がみんな、傷ついている。

もしも、あの時レオナルドからの求婚を受けていたら。

レオナルドもキースも傷つくことはなかった。

そして、自分は……

……それを不幸だとは、絶対に、思わなかったらどう。

それは、今も……

「……絵里香さん。絵里香さんが何を悩みになっているか……ボクにも少しはわかって

いるつもりです」

「キースさん……」

「ボクに、何か力になれることはありませんか？」

「……ごめんなさい」

これは自分で考えなければいけない問題。

事の発端が自分とキースの関係である以上、キースに協力を煽いで状況が良くなるこ



とはまずない。

あるとしたらそれは……キースと別れて、もう一度レオナルドの婚約者に戻ることに  
らしいか

『悲劇のヒロイン気取ってんじゃねえよ。アンタがキースを選んだ時点で、レイにしてや  
れることなんて何一つねえんだよ』

昨日、レオナルドに会うために保健室へ向かう途中、出会った俊介しゅんすけに言われた言葉。

『半端な真似してんじゃねえよ。誰にでもいい顔すんな。アンタはもう選んだんだ。自  
分で、キースを』

その言葉が、胸に突き刺さる。

『振り返んな。んなことしたって、あいつは喜ばねえよ』

(ならば……私はどうすればいいの?)

キースが好きだという事実が変わらない。

だけど……レオナルドのことをどうでもいいだなんて、とても思えない。

全てを満たす答えは……どこを探しても見つからない。

「絵里香さん」

名前を呼ばれて、ハッと顔を上げる。考えに耽ひたっていて、キースがいることすら忘れか  
けていた。

目線をあげた先に見えたキースは、普段と違う……そう、あの時、自分のために伊集院いじゅういん  
と戦っていた時のように真剣で、ただどこかを躊躇ちゅうちゆうかのように目を僅かに泳がせなが  
ら、ゆつくりと口を開いて、

「絵里香さんは……藤原ふじわらのことが好きなのですか？」

……そんな、あまりにもあまりな質問が投げかけられた。

最低だ。

なんて最低で失礼な質問だろうか。

付き合っている相手にそんなことを訊ねるだなんて。

付き合っていると言うことは、好きあっているということであるはずなのに、

(キースさんに、そんな質問をさせてしまうなんて……)

そんな質問をさせてしまった、自分が泣きたいぐらいに情けなかった。

そんな質問をさせてしまっただけで、こんなにも自分の至らなさを感じるのに、

「……ごめんなさい」

こんな答えしか返せない。

それは、誰に対する謝罪だったのか。

キースにだろうか？

それとも、レオナルドにだろうか？

(わからない……私には、わからない……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい)

心の中で繰り返すその言葉もまた、誰に向けての物なのか……わからないまま、何度も繰り返した。

授業の始まりを告げるチャイムが鳴るまで、何度も、何度も……

## 第七章 葛藤

「……今頃、学園では昼休みか」  
い草の匂いの香る畳が敷かれた和室で一人、レイが誰に言つともなしに咳く。  
部屋には一人。つい先程、昼食の用意をすべきかと訊ねてきた女中に断りを入れて、早々に追い払つた所だ。

今日は朝食も摂っていない。そのせいか、さっきの女中はこちらを氣遣うように何度か昼食を勧めてきたのだが、今は何も喉を通る気がしなかった。

空腹を感じないわけではない。だが、それ以上に胸がいっぱいだった。  
一人でいると色々考えてしまう。……いや、色々と考えたいから一人になっているのかもしれない。

昨日、我を忘れて本気で俊介と戦つたこと。

間違つていた自分を、真つ向から叩き伏せてくれた友のこと。

自分の間違いに気がかされ、しかしもう取り戻すことは出来ない。

何をどうやった所で、絵里香は戻っては来ない。

また、もし絵里香が戻ってきたとしても、それはきつと自分の望んだ姿ではないだろう。

掛け違えたボタンは……もう二度と、元には戻せない。それはもうしっかりと縫いつけられてしまつていて、力づく以外で外すことはできない。

「わかつている……わかつては、いるんだ……」

だが、どうしても、忘れられない。

これまで胸に抱いてきた想い全て、洗い流せてしまえるなら、どんなに楽だろう。

だけど、できない。記憶にも、心にも、しっかりと根付いてしまっている。

幼い頃、絵里香と共に過ごした時間から……今に至るまでの思慕の念は、心の中に完全に住み着いて、何をどうやったところで消し去ることはできなかった。

「どうして……」

もっと早く俊介や健一に相談しなかった？

「どうして……」

キースを当て馬にしようなどと考えた？

「どうして……」

どうして……自分は、絵里香から距離を取ってしまったんだ？

何度繰り返した所で、意味もない。

全ては……遅すぎたんだ。気付くのが遅すぎたんだ。

「レオナルド様」

襖越しに聞こえてきた声に、ゆっくりと顔を向ける。先程の女中の物だ。

「何だ？ 昼食ならいらなと言つたはずだ」

「その……お客様がお見えになっておられます」

僅かに語気を強くしたせいにか、少し怯えたような声が返ってくる。

「客……こんな時間に一体誰だ？」

「先日こちらにお越しになった桜屋敷家の方です」

「桜屋敷家……そうか」

「いかがいたしましたよう?」

会いたくないなら断りを入れると、言外にそう含ませながら訊ねてくる。

「……部屋に通してくれ」

「よろしいのですか?」

「ああ。構わない」

「わかりました」

襖の向こうで静かに廊下を歩いていく音が聞こえる。その音が離れていくのを確かめて、大きく息を吐いた。

「桜屋敷が……」

正直な所、今日は誰とも会いたくはなかった。

せめて今日一日は、一人で心の整理をしたかった。

だが、相手がああ桜屋敷美奈であればそもいかない。

こちらの八つ当たりで酷い怪我を負わせた相手を門前払いするわけにはいかない。むしろこちらから出向いて頭を下げなければいけないくらいだ。

「その……失礼します、レオナルド様」

ゆつくりと襖が開けられ、その向こうから現れた美奈が一礼して、部屋の中へと入ってくる。

「ご苦労だった。下がってくれ」

「はい」

レイがそう言うと、女中は襖を閉めてこの場から離れていった。

残されたのはレイと、身の置き場に悩んでいるのか部屋に入ったまま動かない美奈の二人だけ。その姿は、女子の中でも小柄に見える美奈をさらに小さく見せる。ちらちらとこちらの様子を見る度に、頭の後ろで髪をまとめている白いリボンが揺れる。

座ってくれ。

そう言おうとして……しかしそれを口にするより早くレイは立ち上がって一歩、美奈の方へと踏み出していた。すつと、美奈の頬に手を伸ばす。

「レ、レオナルド様!」

驚いたように声を上げる美奈。だが、レイはその動きを止めることなく、そつと自分の右手を美奈の頬に当てた。

「……まだ少し痕が残っているな」

「あ……」

自分が八つ当たりで付けてしまった痣。キースの傷ほど酷くはなかったが、年頃の少女に負わせていいものではない。

「すまない」

ゆつくりと、右手に魔力を込める。自分の持つ、水系統の魔法を。

日本人の持つ魔法は、全部で六つの系統に分けられており、傷の治癒ができるのは水系統の魔法だけだった。どの系統の魔法が使えるかは、生まれた時に決まる完全な先天的な才能であり、努力で身につけられる物ではない。

自分の系統のことを意識したことなどなかったが……この時だけは、自分が水系統の魔法を使えて良かったと思った。

自分の過ちで付けた傷を癒すことが出来るのだから。

……無論、傷を癒した所で自分のしたことが許されるわけではないとしても。  
「……痣は消えたな」

「ありがとうございます、レオナルド様」

「礼など言ってくれるな……お前に責められこそすれ、礼を言われるような謂われはない。嫁入り前の婦女子の顔を傷つけるなど、男として最低な行為だろう」

「ですが、それは……あっ」

治療を終えて、右手をそっと離す。

「とりあえず部屋の中で立ち話をするのもなんだからな、座ってくれ」

「は、はい……」

先に自分が座って見せて、机を挟んだ対面の席に美奈を促す。促されるままに、美奈がレイの対面へと座る。

そして、机を挟んで対峙する二人の間に静寂が生まれる。

わざわざレイに会うために来たのだから、何か話があるのだろうが、美奈はなかなか口を開こうとはしなかった。

また、レイにしても正直な所美奈が一体なんのためにここに来たのかわからなかった。普通に考えれば、八つ当たりで暴力を振るったことに対する非難というのが順当なのだろうが、自分を相手にそれをできるとは思えない。例え本心でどう思っていたとしても、自分の後ろにある物を見れば、抗議できる者などそうそういないだろう。

それに、それ以前の問題として美奈の性格からしてそのためにもわざわざここに向いて来たとも思えなかった。

しかしそうなると話の内容がまったく思い当たらない。話をしに来たはずの美奈は、中々その話を始めようとはしない。前に見合いをした時に考えたように、こちらから何か話を振った方がいいかもしれない。

「校屋敷」

「は、はい」

「学園はどうしたんだ？」

上下共に白を基調としたブラウスとスカートは、アーレント魔法学園の制服だ。それを着ている以上、いつも通り学園に登校したのだろうが、今日の授業はまだ終わっていないはずだ。

「その……早退させていただきました」

「体の具合でも悪いのか？……いや、それならば俺の所などに来るわけもないか」

「あの……わたし、どうしてもレオナルド様にお話したいことがあって、教室まで行っただんです。それで……」

「俺が自宅謹慎を受けていると聞いたわけか。……まあ、自主的に謹慎しているだけだから、サボっているのと同じ事だな」

苦笑して見せても、美奈の表情は硬いまま変わらない。キョット唇を結んで何かに耐えているような、そんな風に見える。

「……それで、俺に話したいことと言いつのは？」

「はい……その……」

美奈は、目をキョットと瞑って、

「申し訳ありませんでした」

大きく頭を下げた。机に頭をぶつけてしまいそうなほど深く。突然頭を下げられたレイは、わけもわからずただ狼狽える。

「桜屋敷……？ 何を……」

戸惑うレイの声には反応を見せず、ただ頭を下げ続ける美奈。

「頭を上げてくれ、桜屋敷。何故お前が俺に頭を下げるんだ。謝るべきは俺の方だ。何の落ち度も非もないお前に暴力を振るったことを、俺はお前に詫言ひなければならぬ。だから、頭を上げてくれ」

「非ありません」

返ってきた大きな声に、レイは一瞬言葉を失う。

「レオナルド様を、あそこまで追い詰めたのは……わたしです。わたしが、絵里香お姉様とのことを詰問したから……レオナルド様が、どれほどお悩みになっていたのかも知らずに、ただ、わたしの独りよがりです……」

「……それこそ、俺の問題だろう。俺が、自分で自分の心を律することができていたなら、あんな醜態を晒すことはなかった」

「ですが、それは」

「言い訳はできない。なあ、桜屋敷。俺は最低なことに、権力に物を言わせて絵里香を奪い返してやるとキースに言い放ったんだぞ」

「えっ……」

「もちろん、そんなことをするつもりはない。だがそれは、そうすることで絵里香が悲しむと思ったからだ。権力を盾にすることに躊躇いを覚えたからじゃない。絵里香が望んでいたなら、俺は容赦なくキースから絵里香を奪い取って見せただろう。無理矢理に、力づくに」

知っていた。

自分の立場が持つ権力の大きさを。

自分が持っている魔法の強さを。

だからこそ、強すぎる力を持っているからこそ、それに溺れてはいけなさと思っていた。

だが……

「それが、なんたる有様だ……空っぽになった心と、芽を出した嫉妬を収めるために、暴力に縋った。お前を傷つけ、危うく……大切な友を斬り捨ててしまっ所だった」

もしもあの場に立っていてくれたのが俊介でなかったなら、自分はもうきつと戻れない場所に立っていただろう。

「わかっただろう？ お前に非などない。全ては俺の心の弱さから生まれた物だ。責められるべきは俺だ」

だから俺を責める、とは言わない。

責められることで楽になるうなんて思わない。

ただ、自分の非で美奈の心に重荷を背負わせるわけにはいかない。

「でも、それは……レオナルド様が、絵里香お姉様のことを好きだったからではないのですか？」

「否定しない。だが、それを言い訳にしようとは思わない。絵里香のことを想っているなら、無理矢理にでも自分を押し殺さなければならなかった。それができなかったのは、

やはり俺の弱さだろう」

「……わたしは、まだ人を好きになったことはありません。いいえ、わたしも、絵里香お姉様と同じで、普通の恋なんてできません」

桜屋敷家は、絵里香の茜澤家と同じく由緒正しい家柄だ。

そう言った所の子女子息は……往々にして政略結婚させられる。絵里香がレオナルドと婚約していたように。美奈がレオナルドと見合いをする事になったように。

「だから、レオナルド様と絵里香お姉様が今をどんな風に感じているのか……わかりません。……だからこそ、わたしのしたことは間違っていたんだと思います。お一人とも、お互いに納得していたはずなのに、何も知らない、子供じみたわたしの言葉のせいで、お二人を迷わせてしまいました」

「だが、それはお前の善意から生まれた行動だろう」

「だからといって許される物ではないと思います」

美奈はピシヤリとそう言い放つ。これは恐らく、何と言った所で言い分を変えることはないだろう。

（それは、俺も同じか……）

二人して自分が悪いと言い、二人して相手に許しを請う。

どちらも怒ってなどいないのに……

「桜屋敷」

「……はい」

「顔を上げてくれ」

「でも……」

「いいんだ。頼むから、顔を上げてくれ。お前の言いたいことはよくわかったから」

そこまで言って、ようやく美奈はゆっくりと顔を上げ、レイと美奈の視線が真っ直ぐ交わった。

「なあ……桜屋敷。俺は、どうしたらいいんだろうな。今以てなおこの胸に残る想いに、俺はどう片を着ければいいと思う」

「レオナルド様……」

「諦めなければいけないと、わかってはいるんだ。わかっていても……やはり、痛い。頭では納得しているのに、心が拒絶しているんだ。なあ、桜屋敷。どうすれば、この想いを消すことができるんだ」

「……わたしには、恋をしたことがないわたしには、わかりません」

「そうか……そうだな」

レイとて絵里香を失わなければ知るよしもなかった痛みだろう。

「俺にも……わからないよ、桜屋敷」

「レオナルド様……あの、わたしに何かできることはありませんか」

僅かに身を乗り出して訊ねてくる美奈に、レイは僅かに目を閉じて逡巡する。

「なら……少しだけ、話を聞いてくれるか？ ちょっとした昔話と……馬鹿な男の情けない話だ」

今更、隠すことはないだろう。抱えることもないだろう。同じ過ちを何度も繰り返すつもりはない。

「アイを……アメリカのことは知っているな」

「……はい。その、わたし達の間では……よく聞く話ですから」

「悪い意味で有名な話だからな。アメリカと、母親のことは」

もっともレイがそうだった話を直接聞いたことはほとんどない。レイが妹のことを大事に思っていることもまた知れ渡っている。アイの存在を疎ましく思いながらも、自分の保身のためにレイの前では取り繕う。

(薄汚い話だ。シユンが知ったらどう思うか。……まあ、考えるまでもないか)

そうやって他人を貶めて起きながら、自分はさも高尚であると言わんばかりに胸を張る者達。それを俗物と見下ろしながらも、レイにはそれ以上の事はできない。

(所詮は俺も次男坊だからな。兄上ほど畏敬の念を集められるわけもない)

俊介しゅんすけならきつと、相手の立場も何もかも無視して、アイを庇おうとするだろう。それでも唾を吐きかけてくる相手がいれば、殴り飛ばしてでも黙らせるだろう。それ羨ましささえ覚える真っ直ぐさ。だから出来るなら、アイの想いが実ってくれればと思っ

思っただけだ……  
「レオナルド様？」

「ああ、すまない。また妙に考え込んでしまっていた。……とにかく、そのアイの話だが。俺は年が近いこともあって、子供の頃から絵里香と二人で一緒に遊んでいた。アイの目が瑠璃色であることも、アイの髪が金色であることも、俺は全く気にしてはいなかった。……だが、兄上は違った。兄上はアイの存在を露骨なまでに嫌っている」

より正確に言えば、アイとその母親の二人を、だが。

「アイと母に別宅が用意されたのは、兄上のせいだと言っても過言ではない。その頃から兄上の力は大きな物であったし、何よりこの日本において主流の意見だ。兄上のアイに対する接し方を非難する者はおらず、賞賛の声を上げる者の方が多かった」

長いものには巻かれるといった所だろう。連綿に連なってきたものばかりをありがたがって、新しく吹いた風に見向きもしない。

伝統や血脈などくだらない……と、思っものの、さすがに立場上表だってそれを口にはできない。

「正直、幼かった俺には理解できなかったよ。自分の妹であるはずのアイを守るどころか、あからさまに毛嫌いして見せた、兄上の在り方が。兄上の影響力があれば、アイに対する風当たりはもっと柔らかくなっていたかもしれないのに、兄上はそれを全く逆の方向に向けた。僅かにいたアイに同情の目を向けていた者もいなくなった。皆、兄上の目を恐れたのだ。より正確に言えば、兄上が受け継ぐであろう権力に、だがな」

そして、嫌が応にも理解させられた。

「アイの味方は俺と絵里香だけになった。兄上の威光も、弟である俺と、俺の婚約者であった絵里香、ひいては西澤家には効かなかったというわけだ。そして、同時に理解した。力……権力や暴力といったその、恐ろしさを。あまりに甘く陶醉してしまいそうなほど便利で、残酷な物だということ。それを理解させた兄の背中を見て、同じように権力を笠に着るような真似はすまいと、そう言い聞かせてきた」

権力や今の立場を惜しいと感じたことなどなかった。

そんな物に縋り付いて醜態を晒すよりも、ただの一学園生として俊介達と毎日を過ごすほうがずっといい。

「その頃から俺は、絵里香と距離を取るようになった。絵里香と過ごすことを、絵里香に



想われることを、絵里香が許嫁であることを、権力に頼ったものにしたくなかったんだ。望めは叶ってしまつから。

絵里香が望まなくても、自分が望むだけで絵里香と共に過ごす未来が叶ってしまつから。

「誰かに決めさせられた物ではなく、絵里香自身に俺を選んで欲しかった。その結果は……知つての通りだ」

つまらない小細工を並べて、絵里香に自由を与えたつもりになって、他人を道化にしたあげて。

「……何様のつもりだったんだろうな、俺は。何が権力に頼ったものにしたくなかっただ。笑わせる」

「でもそれは、レオナルド様が絵里香お姉様のことを本当に想っていらつしやつたというのではないのですか？ その……確かに、やり方は間違っていたかもしれませんが、でも、レオナルド様の想いは……間違つた物じゃないと、わたしは思います」

「俺の想い……か」

「レオナルド様は、今も……絵里香お姉様のことか、好きなのですわ」

「ああ……好きだ。今もまだ、愛している」

だからこそ、辛い。

「忘れ……られないんだ……」

胸の中でざわつく想いを噛み砕いて、口から吐き出す。出てきた声は、少し震えていた。

「レオナルド様……」

スツと、美奈が立ち上がってレイの方へと歩いていく。

どうした？と聞くよりも先に、

……真っ白なハンカチがレイの頬に当てられていた。

「ああ……」

どうやら、いつの間にかまた泣いていたらしい。

「ありがとう」

レイの言葉に何も返さず、美奈はまたこぼれ落ちてきた涙をハンカチで受け止めたのだった。